

外宮におまつりされている豊受大御神は
天照大御神のご神託によって
内宮ご鎮座から約五百年後に
丹波国から伊勢へ迎えられたと伝わります。
京都府北部、天橋立で知られる
宮津市の「元伊勢」籠(この)神社をご紹介します。

※御鎮座地名は奈良時代に「丹波国」から「丹後国」へと改称されています。

特集 豊受大御神のふるさと

籠神社の神門。社頭の狛犬は鎌倉時代の作で、国の重文。



籠神社参道。一の鳥居手前には石造りの宇治橋が。

神宮の歴史は今から約二千年前、垂仁天皇の皇女・倭姫命が、伊勢を天照大御神の永遠の御鎮座地と定められたことから始まります。

外宮の御鎮座は、その五百年後。神宮で編纂された『止由気宮儀式帳(とゆけぐうぎしきちょう)』（804年）によると、第二十一代雄略天皇の夢に天照大御神がご出現になり、次のようにお告げされたと伝えられます。

「高天原から見渡して、求めたところに鎮座した。しかし、私が一所にのみ居るとはなはだ苦しい。そればかりか食事もままならない状態なので、我が御饌都神(みけつかみ)として、丹波の国の比治(ひじ)の真名井(まない)にいる等由気大神(とゆけのおおかみ)を近くに呼んでほしい」

目覚められた天皇は、丹波国から等由気大神をお呼びになり、度会の山田原に立派な宮殿を建て、祭祀を始められました。御饌とは神様にお供えされる食事のこと。等由気大神は豊受大御神の古い呼び名と考えられ、これが外宮にしかない「御饌殿(みけでん)」の創設や、千五百年続く「日別朝夕大御饌祭(ひごとあさゆうおおみけさい)」につながっています。

両大御神をおまつりした元伊勢

京都府北部の丹後半島へは、伊勢から高速道路で約三時間半。宮津湾と阿蘇海を隔てる天橋立は、松島（宮城県）、宮島（広島県）と並ぶ日本三景のひとつで、天界の伊射奈芸命(いざなぎのみこと)が地上にまつられていた伊射奈美命(いざなみのみこと)に会うために懸けたハシゴが倒れたものという伝説があります。

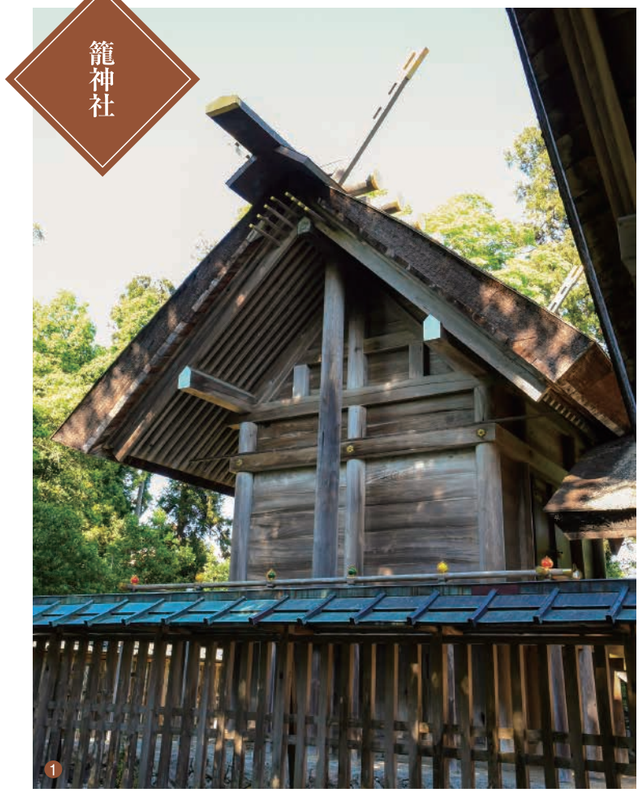
この天橋立の北側に「元伊勢」「丹後国一宮」として名高い籠(この)神社があります。

籠神社は、神話の時代から奥宮・真名井(まない)神社（古称は吉佐宮(よさのみや)）に豊受大御神をおまつりしてきましたが、大御神が伊勢へお遷りになられた後の養老三年（719）に現在地へ遷り社名を改め、主祭神として彦火明命(ひこほあかりのみこと)をおまつりするようになりました。彦火明命は邇邇芸命(ににぎのみこと)の兄神にあたり、天祖より「息津鏡(おきつかがみ)」「邊津鏡(へつかがみ)」の二つの伝世鏡(でんせいきょう)を賜り降臨され、丹後・丹波地方を開拓し、豊受大御神をおまつりした天孫です。

「記紀にはありませんが『倭姫命世記』には、豊鍬入姫命(とよすきいりびめのみこと)の案内により宮中をお出になられた天照大御神が大和の笠縫邑(かさぬいのむら)の次に丹波へいらしてご滞留されたと記されています。元伊勢とよばれる古社は他にもありますが、両大御神を一緒におまつりした記録が残るのは当社のみ」

やがて第八十三代宮司を継がれる海部(あまべ)穀成(よしなり)禰宜が由緒を語ってくださいました。籠神社の宮司は、原初より彦火明命の血脈一系で奉仕されており、海部家は大化の改新以前は丹後や若狭の海人(あま)族を

籠神社









1／本殿は神宮と同じ神明造。心御柱や棟持柱があり、特に高欄上の五色の据玉は神宮と籠神社にしかない貴重なもの。
2／拝殿も神明造で鰹木が8本、千木は内削ぎの内宮様式となっている。
3／禰宜の海部穀成さん。将来83代目宮司を継がれる。
4／海部家に代々伝えられてきた息津鏡（おきつかがみ）。直径17・5cm、後漢時代（約1950年前）の作といわれる。

統率し、中国とも交易を行う有力豪族だったそうです。

神社には、その歴史を伝える宝物がたくさん所蔵されており、彦火明命から連なる直系子孫の名が記された「海部氏系図」は、日本最古の系図として国宝に。また、昭和六十二年に初めて公開された二つの伝世鏡は約二千年前の中国で作られたものとされ、歴史ファンのロマンを大いにかきたてました。

外宮御饌殿と同じ背面扉

海部禰宜のおはからいにより、本殿の特別拝観をさせていただきました。

神宮をほうふつさせる神明造。桧皮葺の切妻屋根に載る鰹木は十本で、千木も内宮と同じ内削ぎ（水平）。高欄に飾られた据玉も五色（青・黄・赤・白・黒）で、これは神社建築史上、神宮と籠神社にしか見られない特徴だそうです。

「創建以来三十年に一度の遷宮制度が守られていましたが、南北朝時代以降は折々の修繕に変わり、現在の本殿は弘化二年（１８４５）建造と伝わります。昭和の遷宮まで屋根は萱葺でしたが、資材の調達が難しく断念しました。おかげ参りブームの江戸期には、伊勢からきた御師が広めた伊勢信仰の影響で神明造に建て替わる神社もあったそうですが、当社はそれ以前（鎌倉期）から神明造であったことが旧跡調査から分かっています」

裏へまわると、本殿背面に御扉が設けられているものの、人が出入りできるような階段は見当たりません。

「古代の人々は、神様は磐座から本殿へ出入りされるとき、背面の扉をお使いになると考えていたようです。神宮の御正殿にはこうした背面扉はありませんが、外宮の御饌殿にはありますよね」

海部禰宜は、この扉は太古の磐座祭祀を伝えているのではと考えています。

上御井神社の起源

真名井神社（奥宮）は、籠神社から五百メートル程離れた山中に鎮まります。境内に入ってすぐの左手には「天の真名井の水」が。海部家三代目の天村雲命が天上界から地上に持ち降り、初め日向の高千穂宮の井戸に、その後ここへ遷したと伝わる御霊水で、倭姫命が外宮の上御井神社の井戸へ遷されたと伝わります。

「真名井神社の古称『吉佐宮』の〝よさ〟とは、ひょうたんの褒め言葉をかつては「天のよさづら」と呼んだことから。吉佐宮では天の真名井の水をひょうたんに入れて神祭りをしていたので、それが社名になったと言われています」

霊験あらたかと御霊水を汲みに来られる方が多いため、神社では汲み場を新たに設置されたそうです。社殿は現在修繕中のため、白い覆いが掛けられています（平成三十年秋まで）が参拝は可能で、社頭に下げられた鈴が豊受大御神のよりしろである磐座につながっており、参拝者との心の懸け橋になっています。

参拝の後ケーブルカーで天橋立を望む傘松公園へ登りました。展望台からは、白砂青松の天橋立が籠神社への参道さながらに続いています。一画には、籠神社の主祭神が天降った島として古代から神聖視されてきた冠島・沓島の遥拝所も。

はるか昔、籠神社の神様は、豊受大御神より五穀や養蚕のタネをいただきました。秋になると立派な稲穂が実り、その光景を見られた大御神が『あなにえし、おも植えみし、田庭（立派に実った良い庭）』と喜ばれたことから、丹波はかつて『たにわの国』と呼ばれていたと当地の風土記には記されています。

豊受大御神が丹波から伊勢へお遷りされて以来、外宮では千五百年余欠かさず日別朝夕大御饌祭が営まれています。



対岸からの観光船が着く「一の宮」船乗り場から籠神社への参道。





京都から宮津へ京都縦貫自動車道で約1時間30分（与謝天橋立IC）。
JR山陰本線なら約1時間40分（与謝天橋立駅下車）。



日本三景の天橋立は古代から神と人の懸け橋とも。左手前が籠神社の杜。

真名井神社





1／磐座信仰を伝える真名井神社。はるか昔、皇女・豊鍬入姫命のご案内で、天照大御神と豊受大御神をともに4年間おまつりしたと伝わる。（現在は修繕中のため社殿や磐座は見られません）
2／境内に立つ石碑。
3／こんこんと涌き出る天の真名井の水。ここから外宮の上御井神社の井戸へお遷しされた。
4／二の鳥居と珍しい狛龍。龍神が持っている宝玉は人の生死を統べるといわれる。



